

インターネットを使ったリーディングの指導

—よりインタラクティブな授業をめざして—

深 澤 清*

序

日本の大学英語教育はいかにあるべきか。この問題に関しては様々に論じられてきている。英語教育といっても、従来から言われている「読み」・「書く」・「話す」・「聞く」という能力の中でどれを強化するのか。また、すべてを包括的に伸ばすのかなど、目標とするものによって様々なアプローチが存在する。この問題をより明確にするためには、まず新入生が中学・高校時代に受けた英語教育について調査することが必要であろう。そこで客観的なデータをを得るために、平成9年4月から平成11年10月までの3年間（毎年4月と10月の2回）、大学の教壇に立つ友人の協力も得て、新入生2084人を対象とした調査を実施した¹⁾。内容は高校時代にどのような英語教育を受けたか（4月実施）というものと、大学入学後にどのような英語の授業を受けているのか（10月実施）というものである。結果について端的に言うならば、85%の学生が高校時代は英文読解、つまり文法語訳を中心としたリーディングにかなりの時間を費やし、学習してきたと回答している。たとえ英作文やオーラルの授業があったとしても、全体としては英文読解が中心であるとの印象を強く抱いている。残りの15%は英語コースに在籍していた学生、個人的に英会話学校に通ったり留学経験がある学生や帰国子女で、いわゆるコミュニケーション中心であったと答えている。しかし、コミュニケーション中心とは言いながらも、その大半は受験を意識して放課後に学習塾に通っており、そこでは英文の文法語訳と文法問題を解く訓練が重点的になされている²⁾。

それでは大学入学後に学生が受講する英語の授業は、高校時代と比較してどのような違いがあるのだろうか。毎年秋に実施した調査結果では、大学入学後は春期、夏期などの長期休暇のために、高校時代に培ったはずの能力、特にリーディングの能力や英単語力が落ち始めていると感じている学生が75%を占めている。このような調査結果から得られた研究課題は、大学では中・高で培ったリーディングの能力を向上させつつ、通常の英語授業以外にも学生が英語学習を継続できるようなシステムづくりがあげられる。その解決の一手段が、ここに述べるコンピューターによるネットワークの利用である。

本学では平成11年4月、私立学校施設整備費の補助を受けて従来のLL教室が一新され、LL機器にネットワーク・コンピューターを併置した60席が整備された。本学事務局、コンピューター・センターの方々のご尽力で、語学教育をする上で理想的な環境が整い、これによって従来の語学教育に不足していた要素を補うことができたと確信している。本稿では

このシステムを使った英語の授業、特にリーディングの授業について報告するとともに、様々なご意見、ご批判をいただき、より充実した英語教育を学生に提供することを目的とするものである。

英語教科書のみ relies することの問題点

学生の調査結果で特に顕著だったリーディングの授業に関して、中高、および大学入学後に学生が受けるリーディングの授業とはどのようなものか。先の調査結果から得られたモデルケースは以下の通りである。教師はシラバスに沿って教材を選定するが、通常は市販された教科書の中から目的にかなうものを選ぶ。学生は授業の前に予習をして、未知なる単語の意味を辞書等で調べ、英文の日本語訳を試みる。場合によっては、前の時間に自分の担当箇所が指定され、授業では予めノートに書いてきた日本語訳を朗読する。教師はそれなりに訳した学生を褒め、修正箇所や重要構文を確認したり、ある場合にはテキストの内容に関連した自分の経験や、学生の将来の指針となるような話を添えることもある。最後には模範的な日本語訳を学生に伝える。その瞬間、学生は筆記用具を手にとり、ノートまたはテキストの行間に日本語訳を書き込んでいく。学生が模範訳をノートにとる最大の理由は、定期試験で英文の下線部訳が出題されるためである。したがってこのような状況では、たとえ授業に出席しない学生であっても、友人からノートを借りさえすれば自学することが可能である。

大学における英語の定期試験は試験時間 50 分～60 分、解答用紙を含む 1～2 枚程度で、形式はテキスト本文の一部が抜粋され、下線部を日本語に訳すことが求められる場合が多い。試験の目的は、授業中に精読した英文の日本語訳ができるかということ、つまり試験でどのくらい英文を日本語にデコードする処理能力があるかを試すことである。しかし、これがシラバスの目指すものならば、大学生に与えられる長期休暇によって無惨にもその目的がうち砕かれてしまう。試験前に集中的に勉強した日本語訳は学生の記憶から消え、英文の内容について断片的な知識が残るだけである。それは休暇後に実施した同じ試験問題の採点結果からも証明できることであり、試験の点数そのものは大幅に下がってしまう。もちろんこのモデルケースは最も回答の多かったものの一例であり、教員によっては副読本の採用やテキストの内容に関連したプリント等を用意し、様々な角度からアプローチされている方がいることもまた事実である。しかし、以上の調査結果を踏まえれば、教科書のみ relies 文法語訳的なメソッドに対しては、何らかの改善が必要なことは明白である。

教師がリーディングの授業を行う上で明確にしなければならないのは、その目的である。例えばそれは、リーディングを通して書かれている内容を把握し味わうことなのか。それとも翻訳の技術を習得させることなのか。学生の専攻する学部や学年によってもその目的は異なるであろうが、最も大切なことは次の点ではないだろうか。すなわち「英語を使って誰とコミュニケーションを図るのか」というものである。かつて日本では欧米の書物を読むために訳読の知識が求められ、書籍を通して海外の情報を受信することが主であった。海外のことを知り学ぶことも大切だが、これからは情報を発信の糧とするアクティブな受信が必要であり、国際的な視野に立って自らの意見を主張しなければならない。そのように考えると、目標とする英語能力は自己表現のためのリーディングであるとも言えよう。

特に本学の場合、新生の 84% が中学・高校時代に受けてきた「英語」に対して、何ら

かの嫌悪感を抱いていることが調査結果から伺える。このような学生に対して、高校時代と同じメソッドを適用しても、効果的な学習はあまり期待できない。具体策としては「英語を学ぶ」という発想から、「英語で何かをする」というアプローチに変えて動機付けを行い、また英語を学ぶことによって将来どのようなことが可能となるのか、学生に理解させることが必要であると思われる。「英語」に対する精神的な嫌悪感をなくさせるという観点からすれば、インターネットを使った英語教育は学習意欲を促すための刺激材となり、また同時にコンピューター・リテラシーの向上も期待される。

英語教育におけるインターネットの利用

英語教育において、授業の手段としてインターネットを使う利点は、大きく分けて次のように三つあると考えられる。

1. 英語学習教材を提供する場
2. コミュニケーション活動の場
3. キーボード入力と基本的なコンピューター操作学習の場

1. 教材提供の場

(1) 教材をシェア (Share) する

教師は通常、授業のために様々な教材を作成し、印刷してクラスに配布するが、教師間でシェアすることは現実的には難しい。そこで教材を HTML ファイルにしてウェブに載せることにより、単に学内の人だけでなく世界中の人がその教材を利用できるようになる。特に、文法練習、TOEIC や TOEFL などの英語資格試験問題は、形式がある程度定まっているので共有しやすい。例えば図 1 のように、設問を解いた人はマウスを使って枠をプルダウンすれば正解が得られるもの。また、図 2 のように 100 語から 150 語程度の英文に対する内容把握問題を解くと、JAVA スクリプトや CGI 機能によって正解率とコメントが与えられるもの。さらに図 3 のようにパズル形式で全問正解するとパスワードがもらえ、次のステップに進むことができるものなどがある。一日の授業の空き時間、および授業開始前の短い時間を利用して、学生は自発的にこのような問題に取り組むことができる。つまり、世界中にある様々な英語の自学用ページをネットサーフィンすることにより、結果的には担当教員以外の授業も受けられることになる。

(2) 学習者の選択に応じて柔軟に対応する教材 (Interactive)

本学の新入生 832 人を対象とした調査結果では、リーディングで躓く原因は、英単語の意味を充分知らないからだと考えている学生が 78% いることがわかった。つまり、英文が理解できないのは、単語の意味が分からないからであると即断し誤解している学生が多く、そこにはパラグラフ単位で内容を把握しようとする姿勢は見受けられない。そのような学生にとって、授業の予習とはいわゆる「単語の意味調べ」であり、テキストの行間に単語の意味を書き加えることに時間を費やしている。このような「英単語依存型」の学生に対するケアとしては、例えば図 4 のように、ウェブページ上の新出単語や、難しいと思われる構文等に

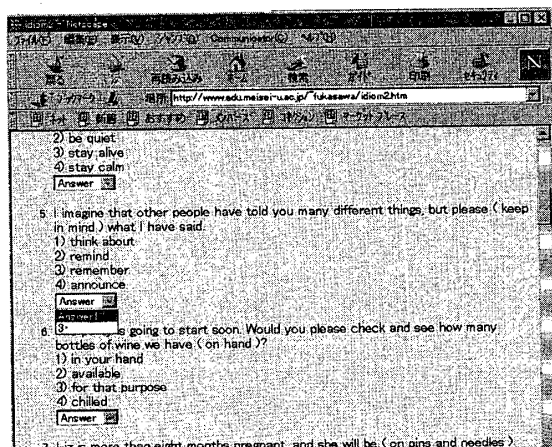


図1 TOEIC用自習問題

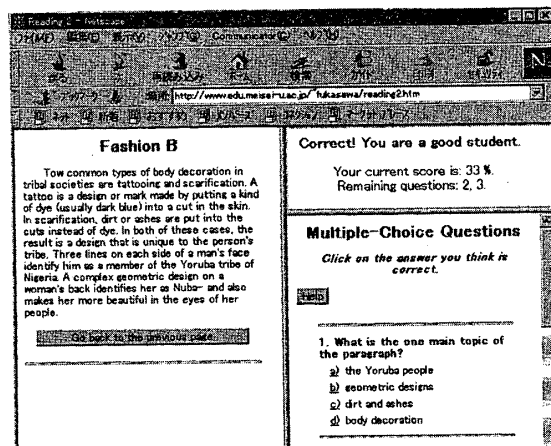


図2 読解自習問題 (正解率が得られる)

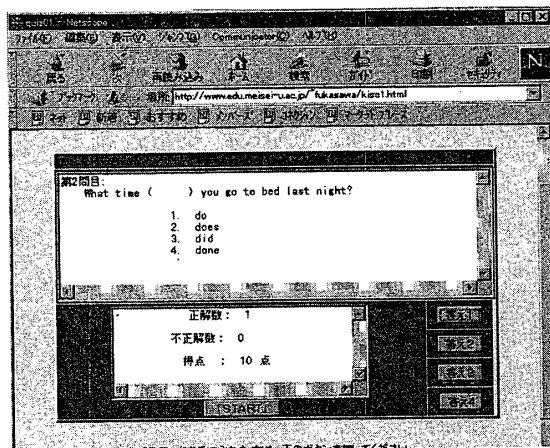


図3 全問正解するとパスワードが得られる

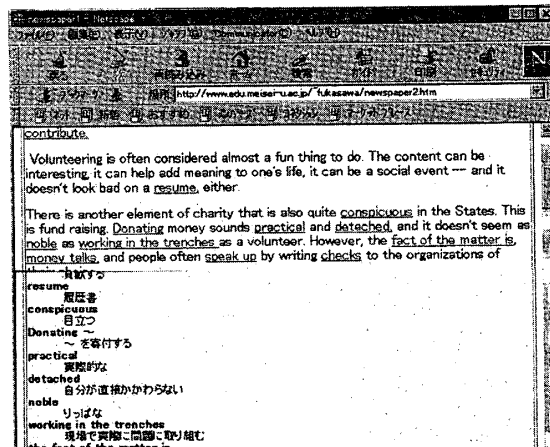


図4 単語の意味が得られる

予めリンクを設定し、必要があればそれをクリックすることによって詳しい説明や情報を提供することが可能である。すなわち学生に与えられた英文のテキストは固定的なものではなく、学生個々のニーズによって柔軟に対応したものとなる。また、ネット上にある英単語検索サービスを利用すれば、簡単に単語の意味を調べることもできる。例えば、ブラウザをもう一つ立ち上げ、英文テキストと意味調べのブラウザを画面上に対置させれば検索し易くなり、精神的負担を軽減させることができる。またテキストに関連した統計や写真が必要ならばネット上で検索することもできる³⁾。さらに、テキストに関する質問があれば、授業以外でも電子メールで担当教員に質問することが可能である。

(3) テキストの修正・加筆が可能である。(Progressive)

言うまでもなく、HTML ファイルはディスクに保存されているので、加筆・訂正を簡単に行うことができる。既存の教材に新しい情報を加えてサーバに送れば、授業の進度に合うように細かい修正を行うことができるが、市販の英語教科書では企画・出版からかなりの時間が経過している場合がほとんどであり、必ずしも内容が現実の状況と一致するとは限らない。確かにウェブを使った授業を展開するには準備に相当な時間が必要であり、教師の負担が増えるが、TA の助力があればこの問題もある程度解消できると思われる。

(4) 画像が提示され、人の温もりが伝わる (Humanity)

ウェブページには様々な写真が貼り付けられるので、英文の内容を補うような情景写真や歴史的建造物などを学生に示すことで、視覚的にも理解させやすくなる。さらに、ホームページ等は作成者の人柄や思いが明確に示されているので、市販の教科書では感じられない人物の「温もり」を感じることができる。一般的にページには作成者のEメールアドレスが記されているので、連絡がとれるようになっている。

(5) 音声を聞かせることができる (Hypermedia)

ウェブページでは、画像ファイルと音声ファイルを関連づけることにより、必要な箇所を発音なり会話を聞かせることができる。しかし教師が授業用にこのシステムを使うにはかなりの煩雑な仕事が必要であり、現実的には難しい。(筆者のリーディングクラスでは併置されたLL用機材を用いて、この機能を補うようにしている。)

2. コミュニケーション活動の場

学生が教室で学ぶ言語表現や場面設定は、教室という閉ざされた空間で行われるので、ある意味では人工的なものになり、現実とのくい違いが生じてしまう。例えば「挨拶」の項目としてよく練習される、“How are you?” “I’m fine, thank you. And you?” という表現は、それ自体には問題がないにしても、実際の言語活動で使われることは稀である。もちろん知っておくべき表現ではあるが、実際には相手が初対面の人であっても、親しい間柄であっても、使用することはあまりない。また、教科書用のテープ教材にしても、録音状態や音質があまりにも理想的なものになり過ぎて、言い直しや雑音が入り交じった実際の会話とはかけ離れている場合が殆どである。このような反省から、最近では教科書にも様々な工夫が施され、例えばアメリカやイギリスでビデオ撮影された人々の会話が文字化され、臨場感を与えるものが増えてきた。ところが、このような教材を用いて教室内で様々なロールプレイを試みたとしても、それはあくまで疑似体験に過ぎず、教室を一步出れば日本語だけが飛び交う現実が待っている。教室内は年間を通して同じメンバーであるため、ペアワークやグループワークにしても、仲間のことは既に分かっているために動機付けがうまくいかない。ちょうど家族のことは何から何まで知っていて、言葉を発しなくとも相手が何を考えているのか理解しているのと同じである。

このような状況を改善するためには、学生の意識を教室の外に向ける必要があるが、その意味ではインターネットを利用したリアルタイムの交流が適していると思われる。その代表的なものがCU-SeeMeというソフトを使ったビデオ会議 (Video conference) である。これは、動画、音声、テキスト、グラフィックを組み合わせるもので、PCの画面上に自分と相手の顔が動画として写し出され、リアルタイムで会話を行うことができる。ポイント・トゥ・ポイント会議のように⁴⁾、事前にIPアドレスや開始時間を打ち合わせるにより、希望する相手とPC上でコミュニケーションを図ることができるが、授業でもこのシステムを活用することが可能である。例えば他大学の教員と時間を打ち合わせておけば、同じ授業時間枠で英語を使って交流することができる。もし音声で問題が生じれば、画面タビングやトーク・ウィンドウを使って文字入力することで会話を補うことができる。さら

に、海外の人々と交流を図ることを希望するならば、The Global School Projects (<http://www.globalschoolhouse.com/cu/services.html>) にアクセスして事前に登録を行えば、Cu-SeeMe を使って交流するのに必要な情報を与えてくれる。また様々なプロジェクトも設定されており、編集されアーカイブとしてまとめられている。様々な国から寄せられたプロジェクトに対する意見には自国の文化的思想が反映され、興味深いものとなっている。

このようにインターネットによる諸外国との交流は、閉鎖された教室内での言語活動を活性化し、学生は語学学習の必要性を認識するようになる。また、英語を勉強している学生は日本だけではなく世界中に存在し、そのような人々との交流を通して国際的視野を広げ、英語を学ぶことの意味を理解すると思われる。

3. キーボード入力と基本的なコンピューター操作学習の場

本学の学生は1年次に情報処理演習の授業でPCの基本的な操作を学ぶが、授業以外の時間にもPCルームやLL教室が自主利用として学生に開放されている。情報学部の学生は別として、日本文化学部両学科の2年生116名を対象とした調査では、自宅と大学のいずれかでもEメールやワープロを使用している学生、つまりキーボード操作を行っている学生は全体の42%であり、予想以上に少ないことがわかった。Eメールに関しては携帯電話がその代わりとして機能し、ワープロは必要以外に利用する必要がないためであるとの回答を得た。21世紀はインターネットの普及率が高まり、プロバイダー接続料金や回線使用料も極端に安くなることが予想されている。さらに学生が卒業後に勤める企業側としても、インターネットは企業戦略に不可欠なものとなることは明らかである。後に述べることになるが、学生が入社後に即戦力として活躍し、インターネットによる情報検索能力、特に英語で書かれたページを理解するためのスキミング能力を養う上でも、インターネットを利用した授業は有効なものとなる。

研究グループによる準備

英語教育にインターネットを利用するための準備として、まず教員のホームページ(HP)を平成10年6月に開設した。(<http://www.edu.meisei-u.ac.jp/~fukasawa>) この目的はHPを学生とのコミュニケーションの場として機能させることであり、教員が学生に期待することや、学生生活に役立つ情報サイトに至るためのリンクを張った。同年9月から翌年の新学期までの8ヶ月間、情報学部2年生6名を実験グループとして選び、定期的に研究室に来てもらい研究授業を行った。そこではインターネットを使って英語で書かれたサイトにアクセスしてもらい、学生がどのようにリーディングを行うのかを観察した。英文ページに対する学生のアプローチは「英語を学ぶ」というよりも「英語を使って何かをする」という印象が強く、従来ありがちな教師から指定された一文の意味が分かるかどうかは問題ではなく、むしろページを作った人物が何を訴えたいのか、何を伝えたいのかを理解することに焦点が当てられていた。内容を理解した学生には心から沸き上がる喜びがあり、それが内的動機づけ(intrinsic motivation)へと繋がっていった。学生が理解したページの内容については、いずれ仲間同士のコミュニケーションへと発展していく。この一連の過程では、教師は助言者であり、あくまで学生の自主性を尊重した。伝統的な教授法ならば、教師が率先して画面

上に映し出された英文を示し、重要単語やイディオム等に分類せよ、暗記させる方法がとられるであろう。しかし英語による海外とのチャットにしても、学生は文法的な誤りはあるものの、自分の意見を確実に相手に伝えていた。

8ヶ月間の予備研究で得たものとは、言語活動とは学習者にとって意味のあるもの (meaningful) でなければならないという考えである。インターネットを使って、ネット上に存在する外国の文学作品に興味を示し、行間に託された作者の思いを味わうことに魅力を感じる学生もいた。また、アメリカのホワイトハウスのHPにアクセスした学生は、外壁の塗装に使われた白ペンキの量や、大統領がホワイトハウス内にある上映施設で家族と一緒に映画を楽しんでいることを知る学生もいた。そこには授業中にありがちな教師から指定された文章の意味が理解できるか否かは問題ではなく、学生が主体となり理解できる部分から読んでいく前向きな姿勢が見られた。さらにHPを作成した人物と学生とが同等の立場で向き合い、ページに関して質問があれば示されたEメールアドレスに自分の意見を送信して、相手とコミュニケーションをとった (Communicative)。数日後には送信したメールに対して相手から返事が戻り (Interactive)、学生はあたかも恋人からラブレターを受け取ったかのように感動し喜んだ。それがまた次の活動への動機づけになる。教室内では information gap を利用したペアワークが主な活動となるが、ネット上ではこれと同様のタスクを用いて世界を相手に情報のやりとりを行うことができる。

さらに研究グループ6名の活動を目にして気がついたことは、インターネットを使うことで、そこから派生する様々な活動ができたということである。すなわち、コンピューターの前に居る時だけが活動ではなく、学生たちはチームとして問題解決の糸口を模索し、探索を継続していく。学生間には日本語によるコミュニケーションが生まれ、活発な議論はディベートの勉強になっている。日本語であっても立派なコミュニケーションであることは言うまでもない。また図書館で資料収集を行うこともあり、「調べて書く」という、学生として最も大切な学問研究の方法を身につけていった。辞書を片手に、学生たちは意見をまとめてそれを英訳し、Eメールで海外に発信したこともあった。

この一連の課程では、教師はいわゆる facilitator の役目をして、学生の学習効果があがるように手助けをしたり、アドバイスを与えただけであった。つまり「教える」という立場ではなく、「学ばせる」ように環境を整えただけであった。

ホームページの機能整備

平成11年3月、新学期の授業に備え、学生とのコミュニケーション用に作成してあった教師のホームページに、以下の教材や機能を加えた。新学期のクラス人数は研究グループの数倍は予想されるので、その人数に対応するようなシステムが必要であった。

1. 学生の自学用英語問題の作成

先述したものと同様に、学生がネット上で自学できるような英単語・イディオム問題、英文読解問題、そして英文法問題をHTMLファイルで作成してサーバに送った。リーディングの授業でこのような問題を直接扱うことはないが、授業前の時間や一日の授業の空き時間に自習させることを目的とした。

2. 情報検索を通して英文速読能力の伸長

インターネット上の情報を効果的に検索するには、キーボード操作に慣れることは勿論であるが、膨大な情報量を迅速に処理する能力が必要である。いわゆる文部省が提唱する「情報活用能力」の育成というものであるが、英語で書かれたページを読むには情報検索と平行して、英文の速読能力が必要不可欠になってくる。この二つの能力を向上させることを目的として、教師のホームページに情報検索用 URL をリストアップし、段階的にこれらの能力を向上させるようなメニューを作成した。初期段階では日本語のページにアクセスさせ、ページの内容に関する細かい質問を与えた。学生はこれに答えながら検索を進めていく。

3. ネット上に辞書機能を持たせる

従来、英和辞書は授業に持っていることが学ぶ者として当然のことと考えられている。昔から教師は学生に辞書を持参する習慣を身につけさせようと、持参しなかった学生をチェックすることはよくある光景である。ネット上には無料の辞書検索機能を持ったサイトがあるので教師のホームページにリンクを張り、授業中であっても学生が辞書機能を使えるように整備した。

4. 写真や動きを伴う gif 画像を HTML ファイルに張り付ける

市販の英語教科書には値段や紙面に制限があるため、英文の内容に関連したカラー写真を豊富に掲載することが難しい。ましてや動きのある映像を紙面に示すことは不可能である。一方、ネット上では jpg 形式や gif 形式などの画像を思う通りに HTML ファイルに張り付けることができるし、動きを伴う画像を示すことも可能である。したがって、ホームページにこのような画像を載せ、授業中に学生が画像を見ながら会話練習をしたり、物語を作ることができるように整備した。

5. 掲示板の設置（平成 11 年 6 月）

授業中およびそれ以外の時間に、学生が自分の意見を書き込むための掲示板を教師のホームページに設置した。これは Perl 言語と CGI 機能を使い、送信用の枠内に氏名とメッセージを記入して送信ボタンを押すと、サーバを経由して瞬時に画面上に掲示される仕組みである。

6. クラス用メーリングリスト開設（平成 11 年 9 月）

授業用の 2 つのメーリングリストを開設した。これは E メールを使って意見や情報を交換するもので、学生がクラスのメーリングリストにメールを送信すると、そのメッセージがクラス内の学生全員に自動的に配信されるシステムである。この方法によって授業以外の時間にもお互いの意見を交換し合うことができ、教師を含めクラスが一つの家族として交流を深めることができる。教師が与えた課題もこのメーリングリストに送信することで、学生はクラス全員の文章を読むことができる。

授業への応用

平成 11 年 4 月、新学期を迎え、インターネットを利用したリーディングのクラスとして、言語文化学科および生活芸術学科の 2 年生を選んだ。2 年生のクラスを選んだ理由は、先述したように 2 年生は 1 年時に基本的なコンピューターの操作を履修しているため、開始時から英語学習に集中できることが確実だったからである。学生はまずウォームアップとして教師のホームページにアクセスして、そこには授業に関する情報が示されていることを確認する。授業で配布した資料や課題などは HP に記録・保存することで、何らかの理由で授業に出席できなかった学生であっても、クラスの活動状況を知ることができるようにした。

リーディングの授業はインターネットによる情報検索から開始したが、初めは指定した日本語サイトから始め、徐々に英語サイトに移行した。その際、要旨を把握するスキミング (Skimming) や、必要とする情報だけをとらえるスキニング (Scanning) について説明し、情報検索においてこれらは大切な手法であることも付け加えた。参考までに以下に示したのは、新学期が始まって二回目の授業で学生に配布した課題用紙である。

具体例 1.

1. 首相官邸 (<http://www.kantei.go.jp/>) にアクセスして、小淵総理が施政方針演説で引用した「21 世紀に生きる君たちへ」(司馬遼太郎氏) を読み、その内容をまとめなさい。また、首相は司馬遼太郎氏の作品をなぜ引用したのか。その理由を述べなさい。
2. キッズルームに入り、総理官邸のバーチャル・ツアーを体験しなさい。
そして、以下の質問に答えなさい。
 1. 首相官邸の住所は何か。
 2. 玄関ホールの絨毯の色は何か。
 3. 大臣応接間は何に使われるのか。
 4. 大客間は何に使われるのか。
 5. 大ホールの天井はどのような形か。
 6. 大食堂はどのような時に使われるのか。

学生はインターネットを利用しながら、配布された上記の課題用紙に理解したことをまとめて記入していく。その際、学生は引用された司馬遼太郎氏の作品の一部を画面上で実際に読み、首相の思いをとらえる。また、首相官邸をネット上でバーチャル・ツアーすることにより、学生は体験的に官邸内部を見学することができた。学生の反応は、このような機会が与えられなければ、恐らく関心を示さなかつただろうとの意見が多かった。国政が討議される場所にバーチャル的に訪れたことを契機として、学生はさらにそのページにリンクされた様々な場所を訪れ、多くのことを学んだ。配布した課題は次回の授業時に提出することとし、授業内で終わらない学生は放課後等にインターネットを活用して検索を続けた。尚、授業で扱った検索課題については、以下にその要点を記す。

- ・国内外の書店にアクセスして、必要とする書籍の検索と注文方法を知る。(将来、卒業

論文を書く時に役立つ。)5)

- ・旅行会社に就職したと仮定し、顧客に魅力あふれるツアーのスケジュールを作る。(宿泊場所とその予約方法。海外の様々な観光地を調査し、資料収集と画像を入手する。この活動により、学生は海外事情と各国の文化や習慣を知ることができる。)6)
- ・日本のアニメ映画「となりのトトロ」が英訳されて海外に輸出されたが、その英語シナリオを読み、日本語版との違いを述べる。(学生は映画や絵本等で内容を把握しているため、かなりの長文であるが拒否反応なく取り組めた。)7)
- ・アメリカ、ホワイトハウスにアクセスして、大統領とその家族のこと、およびホワイトハウスの歴史について学ぶ。(内部写真が示され、それぞれの部屋の役割などを知る。)8)
- ・7月の七夕の時期には宇宙をテーマとして、アメリカ NASA の火星探査計画、スペースシャトルに搭乗予定の日本人宇宙飛行士 Koich Wakata のプロフィールを読む9)。
- ・8月の終戦記念日を前にして、日本に投下された原子爆弾に関する資料や、原子爆弾に対する人々の意見を読み、戦争と平和問題について考えた10)。

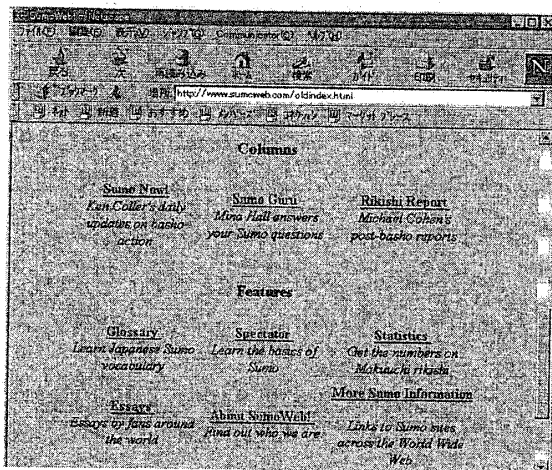
以上の他にも様々なサイトを訪れたが、ページを選択する際に教師が留意した点は、その内容が授業として扱うことが適切であるのか、学生にとって身近なものであるのか、また学生にとって関心の高いものであるのか等であり、予め十分な時間をかけて検討した。さらに、七夕や終戦記念日のように、できるだけ日本の季節感を醸し出すページの採択にも配慮した。

学生が検索に慣れるまでの初期段階では、具体例1にも示した通り質問事項を細分化し、内容把握ではスキミングよりもむしろスキッピングに重きをおいた。また、以下の具体例2で示されている通り、日本語ではなく逆に英語による日本文化の解説を読ませることで、自国の文化を再評価する機会を学生に与えた。

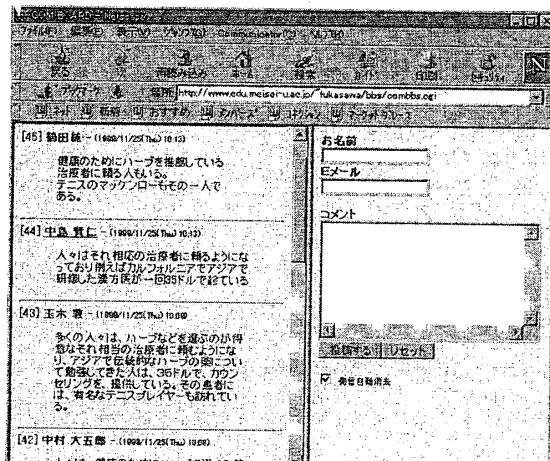
具体例2.

次の場所 (<http://www.sumoweb.com/>) にアクセスして、日本の相撲について考えなさい。

1. 相撲のルールは何か。
2. 相撲の技とは何か。
3. 「はたきこみ」とは何か。説明しなさい。
4. 力士の平均体重はどのくらいだと答えているか。
5. 力士の最低体重の規定は何か。
6. 「すもうはオリンピックの種目としてあるか」との質問に対して、どのように答えているのか。
7. 行司の仕事はどのようなものだと書いてあるか。要旨を述べなさい。
また、すもうの歴史と文化についても触れなさい。
8. 呼び出しの仕事とは何か。要旨をまとめなさい。
9. 床山とはどのような仕事か。要旨をまとめなさい。



相撲に関する HP



掲示板機能

相撲は日本の国技であるが上記のサイトはアメリカにあり、学生は英語を通して日本文化に触れた。日本人でありながら、これまで日本のことにあまり関心を持たなかったことを学生たちは反省したようである。この活動は結果的には英語を手段として、日本文化について考えたことになる。

このような英語のページを巡ることで、英語の授業に対する学生たちの意識に変化が現れた。以前の調査で、英語に対して嫌悪感を抱いていると答えた学生の96%が、他の学生と課題を分担し、プログラムを進めていく中で、英語に対する関心が高まってきたと回答している。これは以前の研究グループ6名にみられた傾向と同じである。また、これは先の研究グループの場合には気づかなかったことだが、検索による活動プログラムを通して、リーディングクラスの学生は英語だけでなく、日本語の作文能力も向上したように思われる。すなわち英文の要旨を日本語でまとめたり、学生間で内容について討議や情報交換を繰り返すうちに、短時間でまとまった日本語の文章が書けるようになり、文章構成も格段によくなってきた。さらに学生の活動を観察していると、「調べて書く」「考えて書く」という習慣が自然に身についてきたようである。大量の英文を読む必要に迫られても、英文そのものを読むことが目的ではなく、あくまで情報を得るための「手段」として使い、その先にあるさらに大きな目標課題に向かっていることに学生は気づいたのである。

掲示板・メーリングリストの利用と問題点

学生に与えられた課題、およびグループによるプロジェクトは課題用紙に記入されて教師に提出されるが、それを学生間で閲覧することは時間的な制約もあり難しい。確かに学生は自分が調べて書いたものを教室内で発表するという手段もあるが、全員がこれを行うにはかなりの時間と忍耐が必要である。この問題の解決策の一つとしては、掲示板の利用が挙げられる。学生は教師のホームページにある掲示板のブラウザに調べたことを記入してサーバに送信する。すると CGI 機能によって瞬時に送り返され、逐一掲示板に記録される。授業中に用いる具体例としては、教師が英文のパラグラフを指定して、その中でどんな些細なこと

でもかまわないので理解したことを投稿するようにと学生に求める。すると学生間には意識しなくとも競争の原理が働き、英文に集中して速読を行う。読解に必要なキーワードの意味は、もう一枚のブラウザで調べながら読み進めていく。能力的に劣る学生であっても、仲間が書き込んだ掲示板の内容がヒントになって内容把握に役立つ。早い段階で投稿した学生の日本語は断片的で、必ずしも文章として完璧なものではないが、後半のものは既に投稿された文章が基になり、加速的に推敲されて立派なものに仕上がっていく。つまり学生は画面を通してお互いに教え合っていると言える。教師はこの時、机間巡視をしながら学生の様子を観察し、能力的に劣ると思われる学生を個別的に指導する。また掲示板に投稿された学生の文章は自動的に保存されるので、教師は学生の理解度を確認することができる。学生にとっても同様に、インターネット経由で随時これを読むことができるので必ずしも授業中にノートをとる必要はなく、授業に集中することが可能である。

この掲示板は投稿する文章の長さが比較的短い場合には効果的であるが、インターネットのブラウザを立ち上げ、ホームページ上の掲示板にアクセスしなければならない不便がある。したがって電子メールを使ったメーリングリストの方が利用しやすいように思われる。先述したように二つのメーリングリスト、すなわち言語文化学科の学生用 (oden@edu.meisei-u.ac.jp) と芸術学科の学生用 (redcap@edu.meisei-u.ac.jp) の二つのメーリングリストを利用して、教師と学生間で様々な情報交換を行っている。学生が投稿した課題やメッセージは自動的にクラス全員に配信されるので、掲示板の機能と同様に他の学生の課題を読むことができ、お互いに刺激し合いながら勉強することができる。また、教師は学生への連絡手段として使う以外に、定期的に「5分間英語」と題して、時事英語、英文法、資格試験対策問題、そして日頃授業で気づいたことや社会問題について思うことをまとめて配信している。またメーリングリストの管理者である教師は、リスト者の確認、学生登録・削除を簡単に遠隔操作で行うことができる。ただし、メーリングリストを使う場合の問題点は、クラスの人数が多い場合、送信されるメールの数も膨大なものになり、読み切れずにたまってしまふことがあげられる。クラスの人数は多くても40名程度に押さえない。さらに、学生のメール設定が間違っている場合には Bounce といって、送信したメールがサーバによって弾かれてしまうことがよくある。今後はTAの導入によって、メール設定等の個別的な問題に対処していきたい。

インターネットを利用した Information Gap

本学LL教室では学生はLL機器を使用し、付属のヘッドセットから音声を聞くことができるようになってきている。教師は教卓のコントロールパネルを操作して座席の左右の学生をペアにしたり、またコンピューターによってランダムにペアを設定し、学生はインターコムを通して未知の相手と話をすることができる。この方法を用いて information gap の活動を行うことが可能である。例えばAとBの二人の学生は、教師のホームページにあるそれぞれ異なるサイトの写真やアニメーション gif 画像を見をみることで、そこに information gap が生じる。そして欠如する情報を得ようとして設定された相手に質問し、必然的に会話が始まる。教師は学生の会話をモニターすることもでき、誰が活発に活動しているのかを把握することができる。現在の授業環境ではPCにビデオカメラは装着されていないため、先

述したように CU-SeeMe を使った活動はできないが、将来的にはこのようシステムも利用したいと考えている。

英語教科書と現代の若者

インターネットを利用した2クラスの学生、計96名の平成11年4月末のアンケート調査によれば、「リーディング」の授業と言え、教科書の英文をただひたすら和訳することだと認識していた学生が実に98%もいた。なるほど中・高校時代、および大学1年時の授業経験からそのような思いに至ったのかもしれないが、リーディングの教科書そのものにも一因があると思われる。例えば視覚的な面から言えば、特に国内の出版社から出されているリーディングの教科書には写真が少なく、場合によっては白黒写真であったり、本文の内容とは直接関係ない写真を使っている場合もある。(そうだからといって、必ずしも写真枚数を増やすことが望ましいというわけではない。)

リーディングの教科書はその性格上、英語の文字が多くのページを占めることになるが、マルチメディアの時代に生きる現代の学生(若者)は、教科書という文字からの情報入手だけで果たして満足できるものであろうか。一般的に教室では何らかの統一的な教科書が使用されているが、様々な価値観をもつ学生のニーズをもはや満たすことはできないように思われる。確かに新聞や雑誌などは文字で満たされているが、個人が読む場合には関心のある部分から読み始め、つまらなくなれば途中でやめ、また次の箇所を読むであろう。半ば強いられて一面からすべてのページを精読する人は稀である。また、書店には比較的安価で内容も充実し、若者の関心を惹きつけるような自学用の英語教材が並べられている。社会の価値観が変化し、学生(若者)の意識も急速に変化しつつある現在、教科書の英文を日本語で理解し、ボキャブラリーやイディオムを覚え、試験対策として練習問題の英作文を暗記するだけの授業では、英語に興味をもたなくなる学生が多くなってもしかたがない。教師側としてはその責任は学生にあると思いがちであるが、あながちそうとばかりは言い切れない。教師の言うことを堪え忍んで聞き、辞書を片手に黙々と単語の意味を調べる学生は、教師にとって理想的な姿として映るであろうが、それでは何事においても従順で受け身的な学生を育てることにはならないか。国際舞台に立ち、自分の意見を言える人物に育てることは、インタラクティブなリーディングの授業を通してこそ可能になると思われる。多くの可能性を秘めた学生の意識を教室内部に閉じこめておくには、もはや限界があるのではないか。

これまで述べてきたように、インターネットを使ったリーディングの授業は、このような問題を改善するためのあくまで一手段であり、決してそれがすべてではない。リーディングの授業に関しては今後も多くの課題が残されており、研究を継続する必要があると思われる。

学生の成績評価

リーディングの授業で学生の主体的な活動が促され、授業に対する関心が高まってくると、クラス全員が何らかの目標をもって積極的に授業を受けるようになった。ところが教師の思惑とは裏腹に、定期試験が近づくと「テストではどのような問題がでるのか」という質問を受けるようになった。このような質問は当然なのだが、見方を変えれば授業とはテストのために存在し、新入生は特にテストの点数に比例して成績の優劣、合否が決まると確信してい

る。新生が中高で受けてきたリーディングのテストは、先述した調査結果からもわかるように教科書の範囲が指定され、授業で既に解説を受けたものに対するいわば暗記力のテストである。大学でも同様に、リーディングの定期試験で出題されるものは、範囲が指定された能力テスト (proficiency test) であると言える。本来、リーディングの力とは新しい素材を読んでも理解できる力であり、日頃の授業はそのための訓練である。その意味から言えば、定期試験では教科書からの出題はあまり好ましくない。

学校教育で行われる教育活動には周知の通り大きく分けると「行動目標」(behavioral objective) と「表現目標」(expressive objective) がある。行動目標とは一定期間学習を行った後に、ある行動目標を達成できるというものであり、表現目標とは音楽鑑賞や美術鑑賞と同様に経験そのものが教育目標である。インターネットを使ったリーディングの指導はコンピューター・リテラシーの面からは前者に属するが、様々な点から言えばむしろ後者側に占める割合が大きい。既に述べたように、担当するリーディングクラスの場合、メーリングリストに投稿された学生の文章はクラス全員に配信されており、これを読めばどの学生が時間をかけて課題に取り組んでいるのか一目瞭然である。教師が評価する以前に、学生全員が各々の評価者となり得る。そのように考えると、テストをあえて実施しなくとも、掲示板やメーリングリストに投稿された学生の課題 (学生が主体的にさらに派生的な活動を行っているか否か)、また授業の出席状況などで「評価」(evaluation) することが十分可能である。以上の点からインターネットを用いた英語教育は、「行動目標」と「表現目標」を同時に達成できると思われる。

最後に、本学 LL 教室のネットワーク化にご尽力いただいたスタッフの皆さんと、学生の調査に協力して下さった各大学の英語教員の方々に感謝申し上げます。

注

- 1) 調査は教壇に立つ友人の協力を得て国士館大学、東海大学、東京農業大学、法政大学、明星大学で実施した。4月実施の調査サンプル総数 2084人。10月実施のサンプル総数 2040人。ただし、学生サンプルの採取に関しては不備な点が多い。例えば俗に言う偏差値によって学生の英語に対する意識も違うであろうし、出身高校のカリキュラムによっても違いが生じる。理想は全国的な調査に基づくべきであった。ただし、受験校と言われる高校では大学入試問題をある程度考慮して授業展開がなされるので、全国大学入試問題を見る限りではサンプル数を増やしたとしても、極端な違いが生じるとは思われない。ただ私的意見としては、従来に比べ高校では長文の文法語訳的な授業展開は減りつつあると思われる。
- 2) 大学新生のほとんどが高校時代は受験英語と呼ばれる英語を学習していることがわかる。授業では文法指導が強化され、文法的に正しい文をつくることに主眼が置かれている。また高校のオーラル授業もこの流れに従って、会話においては頭の中で文を構成し、文法的に正しい文を発語していく訓練がなされていることが多い。したがって頭の中で文ができなければ会話は成立しないことになり、ネイティブスピーカーとのコミュニケーションが不可能という図式が成立する。コミュニケーション能力の開発をうたったテキストにしても、その内容は基本的な日常会話を編集したものであり、「おうむがえし」的にフレーズを繰り返して学習させるものが数多い。
- 3) 例えば、ブリタニカ百科事典はオンライン化されているが、網羅しきれない情報については関連サイトへジャンプできるように設定されている。つまり、ハイパーリンク構造によって、辞書という閉ざされた空間にのみ情報が限定されることなく、さらに詳細な情報を求めて拡大されていく。(Cf. ブリタニカ百科辞典: <http://www.eb.com/>)
- 4) ポイント・トゥ・ポイント会議は、一対一で直接会議をする方法である。会議をするためには、両者の端末で Cu-SeeMe が起動していることが必要である。またグループ会議というものがあるが、これはリフレクターと呼ばれる会議サーバに接続し、転送された動画や音声、テキスト、グラフィックを会議サーバが受け取り、次にその会議に参加しているすべてのコンピューターに転送されるシステムである。グループ会議に接続する

ときには、ポイント・ツー・ポイント会議同様、IP アドレスやホスト名が必要である。さらに、ブロードキャスト会議というものもあるが、これはテレビ放送と似ており、送信側から受信側へと一方的に情報が転送されるもので、受信側からは動画や音声、テキストなどは転送できないシステムである。

- 5) 書籍の検索は、例えば <http://bookweb.kinokuniya.co.jp> や <http://www.amazon.com> などがある。
- 6) 旅行に関する検索として、例えば <http://travel.yahoo.co.jp> がある。
- 7) <http://www.script-o-rama.com/>
- 8) <http://www.whitehouse.gov/WH/kids/html/bill/html>
- 9) <http://www.pao.ksc.nasa.gov/kscpao/schedule/schedule.htm>
- 10) <http://www.csi.ad.jp/ABOMB/index.html>, <http://www.csi.ad.jp/ABOMB/data.html>